

蒙古は支那に出て支那を従へる前に印度の北方も征伐して居れば、中央アジアからロシアの方を征伐して居る、更にポーランドからハンガリーに侵入し、進んでウキンまでも攻め込まうとする程の形勢であつた。そうしてそれが唯一時の嵐として過去つたのみならず、そこに落ついてその國を支配して居る。普通の説によると蒙古は太宗が金を征伐して北方に歸つてから一三三五年頃、始めてその都を造つた。それが有名なカラコルムで今日の外蒙古の中心庫倫から西南、オルコン河の右岸の地である。そのカラコルムの都には遠くローマ法王からも、またフランス國王からも使を寄越したこともある。其使節の書き残した紀行はけふも傳はつて、當時の史實の研究に重要な材料となつて居るのであるが、それによると蒙古の三代目の大汗、後に定宗といふ天子の坐つた椅子や玉座を作つた人はカラコルムに居つた露西亞の鍛冶職のコスマといふものであつた。當時コスマの外にもラテン語や佛蘭西語などを知つて居る露人ハンガリー人等多數この地に居り、中にはその時まで三十一年、二十年、十年の長い月日を蒙古に過したのもあつたと記され、また四代目の憲宗の時の有様を記して、カラコルムには巴里の鍛冶工のギョーム・ビュシエーといふ人が居り、この人がその宮殿に飾られた諸種の酒類を噴出する見事な銀細工の樹木を作つた事、また獨逸人等が蒙古の領地内で鑛夫として使役せられ、金銀を採掘したり、武器の製作にも従事した事なども述べて居る。クリスト教やマホメット教の僧侶等がペルシヤ、アルメニヤを始め一般諸國人と共に蒙古に入り込んで、直接間接にその本國の文化を傳へた事などは更めていふまでもない。天子が位に即く時の儀式の有様などは實に盛なもので、大小諸國の人が各々諸地方の物産を捧げて蒙古の都に集つたといふやうなことが書いてある。ただこゝに述べた點からだけでも、考へらるゝ如く、蒙古人は大凡當時の世界に行はれた、文明を彼等が支那に出るま